

## 第8回町田市中心市街地整備計画策定検討委員会 会議録要旨

### 【会議日時及び場所】

日時 2015年11月13日(金) 10:00~12:00  
場所 町田市役所 3-1 会議室

### 【出席者】 (敬称略)

#### ■委員

真野洋介、西田司、大熊省三、村上卓也、三輪律江、柳沢厚、岩崎俊男、野澤滋享、石井幸隆、大塚信彰、米増久樹、山口拓

#### ■事務局

都市整備担当部長、地区街づくり課、企画政策課、未来づくり研究所、文化振興課、産業観光課、建設総務課、道路補修課、都市政策課、交通事業推進課、住宅課、公園緑地課、UR都市機構

■関係者 5名

■傍聴者 3名

### 【資料】

資料1 中心市街地整備計画策定の進め方とスケジュール  
資料2 第7回検討委員会意見のまとめ  
資料3 中心市街地整備計画素案  
資料4 中心市街地整備計画素案(概要版)

### 【議事要旨】

- ・ 町田市中心市街地活性化協議会の「『町田市中心市街地整備計画策定検討委員会』による町田市中心市街地整備計画の検討内容に対する意見書」を踏まえて作成した整備計画素案について、各委員が提言を行った。

### 【会議内容】

#### 1 開会挨拶

町田市都市整備担当部長から挨拶

#### 2 議事

- (1) 検討の進め方と前回(第7回検討委員会)の振り返り
- (2) 町田市中心市街地活性化協議会の意見について
- (3) 整備計画素案について

- (1) について、委員長から説明
- (2) について、委員から説明
- (3) について、地区街づくり課から説明

## ■ 意見等

### 【町田市中心市街地活性化協議会の意見について】

(委員)

・今回の意見をまとめた経過としては、今年の4月～11月までに協議会を計5回、部会を計9回行った。そこで出た意見を網羅的に意見書にまとめた。情報発信が町田で不足しているという意見が多く出たので、中活協から10番目のプロジェクトとして追加してほしいと提案した。中活協内で計画タイトルについて検討した際、「夢」という言葉が商店主や地域の方々、大型店の方々から一番多く出たので「夢みるまちだ」として提案した。

(委員)

・「夢」というか、「理想」をしっかりと描きたいという思いの表れとして、「夢みるまちだ」があると考えている。

(委員)

・意見書の内容は素晴らしいと思う。あとは誰がどうやって計画を進めるかが大事である。インバウンドの一例として、商店街の中に日本人の学生が経営を行うお店を出し、そこで外国人留学生がアルバイトをし、英語や中国語で接客を行っている事例があり、地元の商店主が外国人に対する接客方法を学ぶ場にもなっている。町田でもそういったWin-Winの関係を構築し、地元や観光客でにぎわうようになるとよい。

(委員長)

・「中心市街地整備計画」は作って終わりではなく、ここからどうステップアップしていくかが非常に重要であり、そのための連携体制をしっかりと作っていくことが必要であるので、今回の中活協と市の協定は、中心市街地活性化基本計画の策定、財源調達につながる動きや実効性を持たせるようなステップアップをするための土台であると考えた方がよい。

### 【中心市街地整備計画素案について】

(委員)

・計画タイトル案「夢を力に」は力が入っており、行政的なニュアンスが出ているが、「夢見るまちだ」は色んな人が色んなことをイメージできそうで、末広がり面白く、発信力があると感じる。

・計画というものは時代の要請で内容が変わっていくぐらいに柔軟に考えている。「計画」という名前については、維持した方が役所の責任感があってよい。

(委員)

・中活協とのやりとりや、体制づくりに向けた動きなど、非常に期待できる状況だと思う。一般の方からしたら「中心市街地整備計画」という名前は、ハード整備というイメージが強く他人事のようになりがちだが、一方で、今後事業を進める際に、交付金や補助金など、国や東京都との協議を考えると、このプロジェクトがどういうバックグラウンドにあるのかが重要であるので、表紙への書き方は別にして、本書にも「計画」と明記しておいた方がよい。

・福祉系や居住系の施策との関係を表記し、連携を図っていくということを示した方がよいのではないかと。

・この計画は、町田駅前や中心市街地の中での初歩的なビジョンづくりとしての、旗振り役や、道しるべになっていくのではないかと。

(委員)

・「計画」という位置づけはしっかりしておいた方がよい。

・行政的に補助金や交付金を取ってくる際には「中心市街地整備計画」というような名前を使うが、一般の住民や新たな担い手の方にこういう計画があることを知らせるために、取っ付き易い、柔らかい表題を頭に付けるなど、場合によってタイトルを使い分けたいのではないかと。

・中身はかなり工夫されていて、非常に読みやすくなっているので、手に取って見てみようかなと思われるようなタイトルにした方がよい。

(委員)

・地元で地区協議会を立ち上げる事となったが、この検討委員会で計画ができて、中活協も動いている中で、地区協議会でも実際に動いていかなければいけないと感じている。この計画があることで、地元も動きやすいのではないかと思う。

(委員)

・「夢を力に」というタイトルは、「夢見るまちだ」が今度は力になって、実現していくという意味でよいと思う。

・町田地区に子どもセンターが来年4月にオープンするので、シバヒロから子どもセンター、芹ヶ谷公園、文学館通り、商店街までの回遊の流れができるといいのではないか。文学館通りが綺麗にできると、いい回遊性ができるのではないか。通りは広すぎず狭すぎない幅の方が、車が通らずちょうどよいと考える。

(委員)

・文学館通りについては、地元の「文学館通りを考える会」にて、検討している。あともう少しというところまで来ているので、実現できたらよいと思っている。

(事務局)

・文学館通りについては、今のところ歩道を広げて、車道を狭め、一方通行化を計画しているところである。一方通行化のために沿道の地権者のすべての合意が必要である中で、一部の事業をされている方から合意を得られず、膠着状態にあるが、この計画の考え方をベースに進めていきたい。

(委員)

・整備計画の資料は、まさに町田をよく見ているんだなということがわかる、大変わかりやすい内容で、素晴らしく、特に意見することはない。

・この計画は、登山で言う道しるべと考えている。

・まだ先の話ではあるが、警察や交通行政がまだ参加していないということが、これからの課題になるのではないか。ただ許可をもらいに行くのではなく、一緒に話し合いをしながら、協調してやっていくのが望ましいのではないか。

・名称をわかりやすくするという中で、「マルシェ・ストーリー・プロジェクト」や、「マルシェ・ストーリー・プランニング」といったものが親しみやすいのではないかと思う。

・10個のプロジェクトをテーマパーク的に見ると、面白いのではないかと感じた。

(委員)

・海老名のららぽーとや、南町田の店舗新設がある中で、町田の中心市街地は無くなるんじゃないかと、ネガティブに受け止めており、商業施設だけでなく、そこに関わっている人そのものも生まれ変わらないといけないという思いが強いので、タイトルに「Reborn」というような要素があるといいのではないか。

・新たな担い手が入り込める仕組みづくりとして、情報を行政からもらい、推進を中活協が担うというのがあってもよいと考えている。新たな担い手が具体的に自分のまちとして参加できる仕組みづくりをつくる視点がどこかに表現されているとよい。

(委員長)

・色々な主体を巻き込む独立したチームのようなものがあり、そういうものが色々な資源に発信したり、巻き込んだりすることができたらいいのではないか。財源や雇用などの話はあると思うが、こういう流れが、このプロジェクト10において、情報をただ発信するだけでなく、発信を逆に受け止めて巻き込むようなことができるとよい。

(委員)

・町田は個性で勝負できるようなまちづくりをすべきである。また、福祉や子育て支援といった要素も入れていくべきではないか。

・2030年の明確な将来像を持ち、現在の課題を把握し、中期的な視点を持って、やれることから進めていくことが必要である。

(委員)

- ・中活協でまとめられた意見書は、色んな意見がたくさん載っており、非常にいいものであると感じた。議論されている方々は、「町田らしさ」というところを強く求めていることがよく伝わってくる意見書だと思う。
- ・整備計画書は、全体的にわかりやすく、いい出来上がりである。整備計画っぽくない立て付けになっており、町田らしい計画になるのではないかな。
- ・「夢を力に！」というタイトルは、どこかで見たことあるようなタイトルであり、もっと町田らしいタイトルがいいのではないかなと思う。一方、「夢見るまちだ」というのは、町田らしさを表しており、計画書っぽくなく、敢えてタイトルにするのも面白いのではないかなと感じた。
- ・「2030年に向かって、こういうまちづくりをしていきましょう。」ということ強く訴える意味でも、2030年に向けてやっていくことをロードマップでわかるようにした方がよいのではないかな。具体的にスケジュール感を表現した方がよい。

(委員長)

- ・中心市街地の最終的な目標年度は2030年度であるが、中活協と市の協定は2021年までということもあり、5年という節目も考えて盛り込めるとよい。10個のプロジェクトの何から手を付けるのかについては、何かしら旗揚げをした方がよい。

(委員)

- ・この整備計画は道しるべであり、ホップ・ステップ・ジャンプのホップまで行っていない段階と捉え、キックオフイベントのようなものをやり、その中で具体的なスケジュールを含め町田市が考えていることを伝えられるといいのではないかな。案の検討は十分であるので、キックオフイベントに向けてスタートしていくのがよいのではないかな。

(事務局)

- ・この計画書に、どこからやるのか、どういう切り口で始めていくのかを、今年度末までに書ききくことは難しいだろう。計画書の出来上りを待つのではなく、中活協や地元の方々とは話し合いを進め、絶えず盛り上がっていくことが大切。そうしないと、道しるべがどこに行っただかわからなくなるのではないかなと、心配をしているところである。
- ・キックオフイベントはいい話だと思ったので、視野に入れていきたい。

(委員長)

- ・来年6月の策定後、間が空かないうちにイベントを行ったり、市民に伝えながら、巻き込んでいく第一歩を必ずやった方がよい。来年度イベントを行うには、予算化など、今年から根回しや色々な検討が必要であるので、事務局にお願いしたい。

(委員)

- ・資料3のP.78の「プロジェクト推進委員会」は、推進母体になることと、アセスメントの二つの役割を持っている書き方であるが、推進とアセスメントは別々に考えた方がよいのではないかな。
- ・資料3のP.79に期待する担い手として「公共空間活用マネジメント組織」や「商店街全体をプロデュースできる人」などが書いてあるが、これらが誰であるのかが重要であり、プロジェクトを引っ張っていき、適した人を見つけられるかどうかというのが勝負である。

(委員)

- ・中活協からの「無理に中心市街地に子育て世代を引き込まなくてもよい。」という意見や、「保育所は、昼間は人が来ないので商店街の一步裏に振る。」などの意見は、中心市街地にマンションばかり立たれるのもどうかという懸念が裏側にあるように思うが、このような、様々な地元意見があるところで、これから議論をどう対応させていくかが重要ではないかな。
- ・資料3の「3・2 取組みの評価」の居住人口が5%増になるという部分は、全体として人口が上がるのが評価されるというより、人口構成の議論をした方がよいのではないかな。生活を支える機能導入推進の対象地域はまちなかのフリンジ部分と想定している中で、そこを丁寧に書き込みした方がよいのではないかな。
- ・キックオフイベントの話は賛同したい。

・推進体制の中で「誰がやるのか。」というところが議論になるが、そこを「あなたもできる！」のような、「あなたが変わらないここは変わらないだよ。」といった意味を込めたタイトルにしてみた方がよいのではないかな。

(委員)

・全体として、整備計画書としては珍しい、わかりやすく、垢抜けた表現になっていてよい。  
・スケジュールがほとんど、「長期で具体化」という書き方になっているが、パイロットプロジェクトのようなものを今の段階で設定するのは難しいのであれば、中期で部分的にリリースできるものは動かしていくという内容を、スケジュールの表現に入れてみたらどうか。具体化できるものは早期に具体化して、一種の実験のような意味合いを持たせると、その部分の計画の評価や、検討する具体的な対象がよりはっきりしてくるのではないかな。

・町田でロングトレイルの需要が増えるのではないかなと思っているが、そういった国内外からの訪問客に対して明示的なインフォメーションセンターがないので、ヨーロッパのような、ひと休みできるようなインフォメーションセンターを置くとよいのではないかな。

・シバヒロの使い方や管理のノウハウを生かしながら、各プロジェクトの特性に応じて、ふさわしい時期に様々な担い手の参画を促すことを、どういう方法でやるのかを考える必要がある。

(委員長)

・北陸新幹線のように、新しい鉄道を整備するときには、鉄道事業者と行政で分担し、インフォメーションセンターや市民が滞在できる空間をつくりやすいが、今の町田駅は、流動の通過点的な機能で手一杯なところがあり、歩行者の居場所をどこに確保すればいいのかが難しい。プロジェクト4に交通ターミナルをつくるという取組みがあるが、鉄道事業者の方で努力できる部分には限界があるので、行政の方で、例えばデッキ下の空間をもっとうまく使って来街者の滞在時間を増やすなどの検討を行わないといけないのではないかな。

(副委員長)

・この整備計画を見た人が、どのように自分の物として捉えるのかということ考えたときに、自分が主体になって夢を見れるという感じは大事である。「夢を力に！」は、外側向きで、夢を統括している人の発言のように感じる。

・資料3の「3・1 進め方の視点」に「担い手の拡大」と書かれているが、それを「3・3 まちづくりの体制」でどこが担うのかがはっきりしないので、中活協の取組みの中に書くと良いのではないかな。

・プロジェクト10の情報発信プロジェクトでは、情報を発信するだけではダメであり、発信した結果、その取組みに興味を持った人を引っ張り込む受け皿になるということが書かれているとよい。アウトプットの内容が比較的多く書かれているが、同じように、巻き込む入口を設けることが書かれるとよい。インフォメーションセンターというか、この場所に行くと窓口の担当者に見えるような拠点ができると良いのでは。

(委員長)

・ISHINOMAKI2.0では、被災地のまちづくりの担い手を一人でも多く増やすため、若い世代や関心が薄い世代を色々なチャンネルから巻き込んでいけるように、20のプロジェクトを作るなど、入口を増やして担い手を広げていくというような形で進めている。また、色々な関心の入口から少しずつ人を育てていくという意図を情報発信の場にも盛り込んでおり、ロビーというか、シェアオフィスのような、ふらっと来てもいいし、ずっと滞在してもいいような場をつくっている。

(委員)

・町田の課題は、こういった中心市街地の取組みの全体をマスコミに対してきちんと語れる人がいないという点である。組織が色々なところがあり、それらを全て把握する人がおらず、それぞれの組織の立場があるため、立場が違う面のお話をする際に違和感が出てしまう。そこで、例えば、アナウンサーのように、しゃべりもしっかりしており、タウンマネージャーのようにまちの活性化について理解をされていて、協議会にも出席し、参画団体とのつながりもあり、若い担い手が話しやすい、「まちだ大使」のような人をインフォメーションセンターに配置するとよいので

はないか。

(委員長)

・キックオフイベント、インフォメーション、プロモーションがセットになったものが、今の市と中活協の連携から更に一歩進んで産み落とされれば、各プロジェクトも少しずつ浸透し、市民との橋渡しもうまく行くのではないか。既存の人材ではないところから、こういったプロモーションや橋渡しに専従する人を見出すことになるのだろう。

・やはり「顔」というものが見えないと人が集まらないし、発信もできないというのはあるので、これから色々な目線で、町田ではどのような人が適任か、ということを考えていくべきである。

以 上